福音書から見る「裏切り者」ユダ

外国語学部　国際文化交流学科３年
新名　由佳

1　はじめに

キリスト教の聖典には、ユダヤ教の経典でもある救い主キリストの準備の書『旧約聖書』とイエス・キリストによる人間の救済に関する書『新約聖書』がある。『新約聖書』は 27 の文書からなり、その中の福音書にはイエスの生涯の流れや言行が記録されている。イエスは、ユダヤ教の教義に疑問を感じ、独自の伝道を行っていたため、ユダヤ教の祭司長による迫害を受ける。イエスが捕えられ、処刑される原因となったのが、弟子のひとりユダの裏切りだとされている。

裏切り者の意の代名詞としてその名が用いられるユダだが、彼は実際にはどのような事情でイエスを「裏切る」という行為に至ったのだろう。おそらく、ユダの「裏切り」行為についての解釈は、イエスの生涯・言行を記録した福音書を中心に伺えると思われる。福音書は伝記ではなく、イエスの言行をもとに、イエスがキリストであることを宣教する目的で著されたもので、それぞれ異なった立場で資料を取り扱っている。そのため、福音書の著者（マルコ、マタイ、ルカ、ヨハネ）ごとにユダ像が異なると考えられる。著者によっては、単なる裏切り者とは言えないユダ像を描いている可能性もあるかもしれない。福音書のユダに関する記述を読み解いていくことで、ユダの「裏切り」行為の真実が見えてくると思われるので、四福音書を成立順に考察していく。

2　福音書におけるイエスとユダ

2.1　四福音書について

まず、マルコ福音書の概要を押さえておく。紀元後七〇年代に史上初めて著された「福音書」が本書である。福音書成立以前にすでにまとまった形で伝承されていたイエスの受難・復活物語と、受難以前のイエスの言行に関する伝承を統合して編集することで、イエスの受難・復活の意味をイエスの生涯全体との関わりにおいて捉えなおした。また、マルコ福音書のイエスは弟子たちに対して極めて批判的であるというのが特徴である（荒井 2007：38-39）[i]。

マタイ福音書は、主にマルコ福音書と Q 資料を用いて編纂された。Q 資料とは、マタイ、ルカ両福音書に共通するイエスの語録集である。思想的特徴は、イエスの言行は旧約聖書における預言の成就とみなされていることと、使徒たちは、イエスにより高く評価されていることである（荒井 2007：56-57）。

ルカ福音書も主にマルコ福音書と Q 資料を用いて編纂された。思想的な特徴として、イエスの福音を宣教する「使徒たち」が理想化されていることが挙げられる（荒井 2007：73）。

ヨハネ福音書は、共観福音書に対して、思想・文体などが独特で、ユダに関する描写も共観福音書とは大きく異なる点が多い。共観福音書が用いている伝承資料と重なる資料をいくつか採用しているが、全体として独自の資料に拠り、三福音書には依拠することなしに自らの福音書を編んでいる（荒井 2007：91）。

2.2　イエスの生涯とユダ

イエスの母マリアは、処女のまま神の子を身ごもったと大天使ガブリエルに伝えられ、イエスが誕生する。少年時代はガリラヤ地方のナザレで過ごし、のちに洗礼者ヨハネにより洗礼を受けて伝道を開始する。イエスは悪魔の誘惑に打ち勝ち、弟子を増やしながら各地で布教活動をした。嵐を

しずめたり、水をぶどう酒に変えたり様々な奇跡で名声を高めたが、律法[ii]を重視するユダヤ教により迫害が強まる。ここからイエスの受難が始まる。ユダがイエスを裏切り、弟子たちとともに最後の晩餐をともにしたあと、神に祈りをささげているときに捕えられ、磔刑に処され、埋葬される。この受難のあと、イエスは復活することとなる。

次に、四福音書を通して、主にユダが登場する場面の流れを追うと以下のようになる。最初が「十二人の選び」[iii]で、イエスの十二弟子の名が挙げられる場面である。ここでは各福音書において、ユダの説明に際して、ユダがイエスを「引き渡す」とされているか「売り渡す」とされているかのどちらかで、ユダの裏切りに対する積極性の違いをみることができる。次に、「ベタニアの香油」で、ベタニアという村の女が高価な香油をイエスに注ぐ場面である。女の行為は無駄使いであるととがめられるが、イエスは女を賞賛した。この時、とがめた者がユダだと言及されていれば、イエスとは異なる考え方を持つユダ像が見える。次に、「ユダの裏切り」でユダは祭司長たちにイエスを引き渡す約束をするが、ユダの動機の有無とその内容が福音書ごとに異なる。「ある弟子の裏切りを予告」では、弟子たちのうち一人が私を裏切るだろうとイエスが予告する。イエスの予告に対して弟子たちの自問があれば、ユダ以外の弟子にもイエスを引き渡す可能性があったことを示唆していることになる。この時、ユダが最後まで食事の席にいたかどうか注目することで、ユダが他の弟子たちと最後の晩餐をともにし、のちの「躓(つまず)き予告」の場面にも同席していたかということが読み取れる。「躓き予告」では、弟子たちが躓く、つまりイエスを見棄てて逃げ去ることがイエスによって予告される。また、イエスは弟子たちと再会も予告する。この再会が、弟子たちのイエスを見棄てたという罪を赦していることになり、予告の場面にユダも同席していたかということは重要になる。その後は、イエスが捕えられる「捕縛」、「ユダの死」の場面にユダは登場する。福音書によっては描かれていなかったり、内容が異なったりする場面もある。

3 共観福音書からみるユダ

この章では、内容や叙述に共通点が多い共観福音書を成立順（マルコ、マタイ、ルカ）に考察し、それぞれの福音書でユダが登場する場面を比較・分析していく(文末の<表1>を参照)。

3.1　マルコ福音書のユダ

最初にユダが登場するのは、「十二人の選び」（三13-19）[iv]の場面である。イエスが選んだ十二人の弟子の名が挙げられ、最後に「イスカリオトのユダ」の名とともに、「このユダはまた、イエスを引き渡したのでもある）[v]（三19）と言及されている。ここで用いられる「引き渡す」(paradidōmi）という動詞は一般的には「裏切る」「売り渡す」と同じ意味とみなされている。確かに、マルコ福音書の「ユダの裏切り」の場面からわかるように、この「引き渡す」は「裏切る」と同義だと考えられる（荒井 2007：40）。マルコ福音書におけるユダは、単にイエスを「引き渡した」人物にすぎないとも考えられる。なぜなら、あとでみるように、例えばルカ福音書では、「引き渡した」のではなく「このユダは、売り渡す者になった」(ルカ六16)とされているからだ。マルコ福音書ではルカ福音書ほどお金のために積極的にイエスを「売り渡し」ていない。

次に、「ベタニアの香油」(一四3-9)の場面で、ベタニアの女が高価な香油をイエスの頭に注いだとき、何人かの人は厳しくとがめたが、イエスは彼女の行為を賞賛した。ヨハネ福音書では、女をとがめたのはユダであったが、マルコを始めとする共観福音書では、ユダとは言及されていない。次の「ユダの裏切り」（一四10-11）の場面では、ユダがイエスを引き渡そうと祭司長たちのところへ出かける。「彼らはこれを聞いて喜び、彼に銀貨を与えることを約束した。そして彼はどのようにしたらイエスを首尾よく引き渡せるか、その機会をねらっていた」とされている。この場面は、他の福音書の例を挙げると、マタイ福音書ではユダが報酬を要求しており、ルカ福音書ではユダに悪魔が入り込んだと述べられている。つまり、銀貨が欲しいから、あるいは悪魔が入り込んだからと

いうわけでもなく、マルコ福音書においては、ユダの裏切りの動機は明らかではない。

「ある弟子の裏切りを予告」(一四 17-21) では、イエスと十二弟子の食事の席で、弟子たちのうちの一人が自分を引き渡すだろうとイエスが予告をする。弟子たちは「まさか、この私では」と戸惑う。このような弟子たちの自問は、弟子たちの一人ひとりにイエスを死に引き渡す可能性があることを示唆しているのではないかと考えられている(荒井 2007：45)。マルコ福音書で弟子たちは、つねに鈍い頭の持ち主として描かれている（クラッセン 2007：155)。このように、弟子たちに対して批判的であるマルコ福音書では、弟子たちはユダと似たりよったりで、誰もがユダになりうる可能性があったかもしれないと解釈できるため、相対的にユダの「裏切り者」としての性格が弱められることになる。

次に、「最後の晩餐」(一四 22-25) の場面についてである。イエスがパンを取り、弟子たちに与えた。また、杯を取り、感謝して彼らに与えた。「聖餐式[vi]」の起源となる最後の晩餐の場面であるが、ヨハネ福音書の「裏切る者の退去」(一三 21-30) では、ユダはパンを受け取ると、「ただちに (食事の席から) 出て行った」(一三 30) とされている。しかし、マルコ福音書では、「最後の晩餐」において、ユダが不在であることは言及されていない。したがって、ここではユダもまた他の弟子たちと共に「聖餐」に与ったと想定される（荒井 2007：50)。このことから、食事のあとの「躓き予告」(一四 26-28) にもユダは共に存在していたとも考えられる。「躓き予告」では、イエスは弟子たちに「あなたたちは、全員が躓くことになるだろう」、自分の復活後には「あなたたちより先にガリラヤへ行くだろう」と予告する。この時イエスは、自分を見棄てて逃げ去ることになる弟子たち全員に対してガリラヤでの再会を約束する。この再会の約束は、弟子たちの罪が赦されることを意味していると考えられる。そして「躓き予告」にはユダもいたと考えられ、ユダもイエスとの再会の約束をしていることになり、ユダも含めて弟子たちの罪は赦されていたと考えられる。つまり、ユダがとびぬけて悪い弟子であると捉えられていたわけではないということだ。

次に、「捕縛」(一四 43-49) の場面である。ゲツセマネの園[vii]にて、ユダの「ラビ[viii]」という呼びかけと接吻を合図にイエスは群集に捕らえられる。弟子たちはイエスを見棄てて逃げ去ったとされるが、ユダのその後は描かれていない。すなわち、マルコ福音書では「ユダの死」の場面が描かれていないため、先述のように、「躓き予告」でイエスが弟子たちに告げた再会の約束を、ユダも果たしていた可能性があることになる。さらには、もし、イエスとの再会を果たし、イエスを「引き渡した」罪が赦されているとすれば、ユダの「裏切り」はイエスによって導かれたものだとも考えられよう。最も早い時期に書かれたマルコ福音書において、このように考えられるということは、悪人としてのユダが否定される可能性があるということに注目される。

3.2 マタイ福音書のユダ

マタイ福音書はマルコに比べるとかなり長く、ユダに関してはマルコよりもずっと多くの材料を提供している。受難物語の叙述ではきわめて多くの部分で重複しているが、マタイ福音書はユダについて重要な新材料を提供している（クラッセン 2007：187)。

イエスによる「十二人の選び」(一〇 1-4) の場面は、マルコの同場面とほとんど同じである。「ベタニアの香油」(二六 6-13) でも、ベタニアの女をとがめたのは弟子たちであるが、ユダだとは言及されていない。

次に「ユダの裏切り」(二六 14-16) であるが、ユダは祭司長たちのもとへ行き、「あなたたちは私に何を与えてくれるか。この私は、あなたたちに彼を引き渡そうと思うのだ」(二六 15) と言った。「そして、彼は、その時より、イエスを引き渡すための良い機会を狙っていた」(二六 16) とされる。マルコ福音書とは違い、ユダが積極的に報酬を要求していることがわかる。

「ある弟子の裏切りを予告」(二六 20-25) では、マルコ福音書と同様に、イエスの予告に対して弟子たちの自問がある。一方で、マルコ福音書にはない記述が付け加えられている。「そこで、彼を引

き渡す者、ユダが応えて言った、『ラビよ、まさか、この私ではないでしょうね』。イエスは彼に言う、『それはあなたの言ったことだ』」(二六 25) という記述だ。ここではイエスを引き渡す可能性が他の弟子には示唆されておらず、引き渡す者がユダであるとはっきり言及されている。また、ほかの弟子は「主よ」と呼びかけているのに対し、ユダだけがイエスを「ラビ」と呼びかけている。実際には、イエスは弟子たちに「ラビ」と呼ばないよう教えている（二三 8)。マタイはこの言葉から、「弟子」の仮面を被るユダの厚かましさを読み取らせようとしているのではないか(荒井 2007:61)。つまり、マタイ福音書では、マルコ福音書よりもユダの弟子としての地位が低く見積もられているとできよう。

その後の「最後の晩餐」、「躓き予告」はマルコ福音書とほとんど同じであるので、両場面にユダは同席していたと考えられる。したがって、ここでは他の弟子との間に優劣の差がつけられてはいない。

「捕縛」(二六 47-56) でも、ユダはイエスを「ラビ」と呼んでいる。「ラビ、喜びあれ[ix]」(二六 49) と言ってユダがイエスに接吻すると、イエスは「友よ、あなたがなそうとしていること [をなすがよい]」(二六 50) と返す。さらに、イエスはユダに対して「友よ」と呼びかけている。マタイはこの呼称でイエスが、その「ラビ」性を相対化し、ユダと同じ位置に立って発言している印象を読者に与えようとしているのかもしれない。また、この勧めには、イエスの捕縛はユダの裏切り行為の結果であるのに、むしろイエス自身の意思によってなされたという、マタイのイエス理解が反映されている（荒井 2007：64)。呼ばないようにと教えられているのに「ラビ」と呼んだことや、イエスのユダに対する捕縛の促しは、マタイ福音書による、ユダを考察する上で重要な新材料だと言える。

最後に、マルコ福音書にはないユダの死に関する場面がマタイ福音書にはある。「縊死(いし)[x]」(二七 1-10) の場面で、ユダは「イエスが [死刑を] 宣告されたことを知り、後悔して祭司長銀貨三十枚を祭司長たちと長老たちとに返して言った」(二七 3-4) というように、イエスの死が自分の罪であると後悔している。しかし、自分で始末しろと言われて、銀貨を神殿に投げ入れて、首をくくったとされる。後悔したとはっきり書かれていることから、ユダはイエスが死刑にされるとまで思っていなかったとも考えられるのではないか。

マタイ福音書のユダは、祭司長たちに報酬を要求していたり、そう呼ばないよう教えられているのにイエスを「ラビ」と呼んでいたり、ユダの裏切りに対する積極性が見られる場面もある。これは、マルコ福音書成立時になかった、あるいは用いられなかった伝承資料も関わっているかもしれない。しかし、全体的にはマルコ福音書の記述と同じであり、ユダの後悔の場面も含まれることから、イエスを死に至らしめるという意味での裏切りは考えていなかったのではないか。さらに、イエスがユダに対して捕縛を促していることから、ユダの「裏切り」にはイエスの意志が関わっていたとも読み取ることができる。

3.3　ルカ福音書のユダ

共観福音書のひとつとされるルカ福音書だが、確かにマルコ・マタイ福音書と一致共通するところが多い。しかし、ユダに関する記述を比較していくと、多少性質が異なるように感じられる。それは悪魔の登場であったり、共観福音書には含まれないヨハネの記述と一致する点があったりするからだが、用いた伝承などの資料にもよると考えられるので、特にマルコ、マタイとは異なる描写に注目しながら考察を進める。

まず、「十二人の選び」(六 12-16) だが、3.1 で述べたように、ルカ福音書では、マルコ・マタイとは異なり、ユダはイエスを「引き渡した」のではなく「このユダは、売り渡す者になった」(六 16) とされている。「売り渡す者」という言葉をルカだけが使用したということから、マルコ・マタイのユダ像とは異なり、イエスを積極的に売り渡そうとしたルカのユダ像が読み取れる。

塗油の場面「罪の女の塗油」(七 36-50) にユダに関する描写はない。

次に、「ユダの裏切り」(二二 3-6) では、まずユダの中にサタン (悪魔) が入り込んでおり、ユダは祭司長たちや神殿守護長官たちと話し合い、ど

のようにかしてイエスを引き渡す方法を協議したとされる。最も注目すべき点だと考えられるのが、ユダの中にサタンが入り込んでいたとされることである。ルカ福音書だけでなく、ヨハネ福音書でもユダの中に入り込んだサタンは、ユダの心にイエスを引き渡すことを吹き込んでおり(ヨハネ一三2)、ユダの「裏切り」行為を助長している。サタンについてはルカの創作ではなく、共通の伝承に遡るとみられ、この伝承を利用したのは、ルカとヨハネだけであったと考えられている(荒井2007:76)。マルコ・マタイ福音書で利用されていないということは、これらの福音書の成立以降の伝承だろう。

次に、「ある弟子の裏切りを予告」(二二21-23)であるが、ルカ福音書の場合、イエスがある弟子の裏切りを予告した際、弟子たちの「まさか、この私では」という文言が削除されている。弟子たちの自問がないということは、3.1で述べたような、弟子たちの一人ひとりにイエスを死に引き渡す可能性は示唆されていないと考えられる。すなわち、マルコ福音書に比べると、ここではユダの弟子としての地位は貶められていることになる。

「躓き予告」(二二31-34)では、マルコ・マタイのように十二弟子全員に躓くことが予告されておらず、ペトロがイエスを三度否認することのみが予告される。そして、「捕縛」(二二47-53)において、弟子たちがイエスを見棄てて逃亡する描写はない。マルコ福音書では、弟子たちが批判的に描かれていたのに対し、ルカ福音書では「使徒たち」(弟子たち)が理想化されていることが特徴となっていたので、この場面にも顕れていると考えられる。また、マルコ・マタイ福音書には見られない、ユダが「彼ら[xi](群衆)を先導していた」(二二47)という描写がある。この描写には、イエス捕縛に対するユダの積極性が強調されている(荒井2007:81)。そして、ユダはイエスに接吻しようと近づくが、イエスに「ユダよ、あなたは接吻で〈人の子〉を引き渡すのか」(二二48)と言われ、接吻せずに終わっている。

ユダの死に関しては、ルカ福音書では言及されていないが、ルカが著作した「使徒公伝」でユダの死を描いている。「この者(ユダ)は不義の報酬で、ある地所を手に入れたが、[そこへ]まっさかさまに落ちて、腹が真中から引き裂け、腹わたがみな流れ出てしまった」(一18)となっている。ユダの死は、「不義の報酬」を受け取ってイエスを裏切った罪に対する神の「むくい」とみなされていると見てよいであろう(荒井2007:87)。

ルカはユダの行動の原因を彼以外の力(サタン=悪魔)によるものとした。そのためにルカは、ユダをさほど悲惨な光の中で描くことはしていない。R・H・ライトフットはルカの文書を、ユダの背信を誇張するものではなく、むしろそれは彼の罪を説明しようとしたものだと解釈した(クラッセン2007:223-224)。「十二人の選び」で、あえて「引き渡した」のではなく「売り渡すものになった」と書いたり、ユダが群衆を「先導していた」としたり、ルカの中で、「裏切り」に対して積極的だったユダ像がうかがえる。しかし、悪魔がユダの中に入り込んでいたという描写は、その時の行動がユダの意思ではないと捉えることもできる。背信ではなく、彼の罪を説明しようとしたというライトフットの解釈は非常に当てはまると考える。

4 ヨハネ福音書のユダ

この章では、四番目に成立したヨハネ福音書におけるユダ像について考察を進める。先述したように、共観福音書と比べると異なる点が多い。ユダに費やされた語数が最も多いのはヨハネ福音書で、最も批判的にも書かれている。宗教改革の時期に活躍した偉大な神学者たちは、四福音書をひとつのものとして扱った。つまり、ユダに対する否定的で大げさに脚色された、教会の初期時代に人気のあったヨハネの見方が、マルコの客観的な叙述を圧倒しつくしたということだ(クラッセン2007:38)。

まず、「ユダの裏切り」について、共観福音書と異なり、イエスの受難物語が始まる以前に、すでにユダの裏切りが示唆されている(六64-71)。イエスは、「あなたがた、十二人を選び出したのは私ではなかったか。しかしあなたがたの一人は悪魔である」(六70)と言う。その彼はユダであると言及されている。

次にユダが登場するのは「ベタニアの香油」(十二1-8) の場面で、ユダは高価な香油が貧しい人々に施されなかったことを嘆く。ベタニアの女を咎めるのがはっきりユダだと書かれているのはヨハネ福音書だけである。さらに、その理由は、「貧しい人たちのことを心にかけていたからではなく、盗人であり、金庫番でありながら、その中身をくすねていたからである」(十二6) とされており、ヨハネ福音書でしか見られないこの句は、ヨハネの否定的なユダ像を反映していると考えられる。

次に、共観福音書には見られなかった「洗足」(十三1-12) の場面でユダについて言及される。イエスと弟子たちが食事をともにしている場面で、悪魔はすでにユダの心に彼を引き渡そうと吹き込んでいた (一三2)。悪魔がユダの心にイエスを引き渡すことを吹き込んでいたということは、ルカ福音書と同様に、引き渡すことを決めたのはユダの意思ではなく悪魔というようにも捉えることができる。イエスであれば悪魔を退けることも可能であると思われるが、それをしなかったということも重要である。その後、イエスは弟子たちに愛の象徴的行動として彼らの足を洗うのだが、ここではまだ、ユダは席を外していないため、ユダも洗足の対象だったと考えられる。一方で、イエスは「自分が誰を選んだか、私にはわかっている。だが、私のパンを食するものが私に向かってその踵を上げたという聖書が満たされなければならない」(一三18) と言う。この文は、詩篇四一篇10節の自由な引用で、「踵を上げる」は、「踏みつける」というような意味である。イエスに向かって踵を上げるということは、イエスが踏みつけられる、つまり裏切られることを意味していると考えられる。ユダの裏切りはすでに聖書の中で示唆されており、イエスはその弟子たちを―ユダを含めて―「極みまで」愛したが、ユダがイエスを裏切ることは神の定めであり、そのことをイエスはわかっていた、ということであろうか（荒井2007：100)。ユダの「裏切り」が聖書が満たされるために必要であったとすれば、ユダの心にイエスを引き渡すことを吹き込んだ悪魔を退かせなかったことに納得がいく。

次の場面の「裏切る者の退去」(一三21-30) は、共観福音書の「ある弟子の裏切りを予告」の場面にあたる。弟子の一人がイエスに誰が引き渡す者なのかを問うと、イエスは「私がパン切れを浸して、与えることになる人がそれだ」(一三26) と言う。その後、パン切れを受け取ったユダだが、この時にユダの中にサタンが入った。その後に、イエスは「しようとしていることを、早くしてしまえ」(一三27) という促しの言葉をかけ、ユダは食事の席から出ていく。イエスの言葉は、もちろんユダに向けて発せられたものだが、ユダの中に入ったサタンに向けて言われたとも考えられる。イエスはすべてわかった上で、ユダを介してサタンに自分の捕縛を促し、聖書が満たされてユダがイエスを「裏切る」という神の定めを成就しようとしたことがこの場面でも読み取ることができる。

その後のイエスの祈りの場面では、「残される人々が一つに守られるように」という趣旨の祈りを献げている。イエスは自分がこの世からいなくなり、神のもとへ赴くことを悟り、「私が彼らを守り、保護しました。そして、彼らのうちの誰も滅びませんでした。ただ滅びの子を別にしてでしたが、それは聖書が満たされるためでした」(一七12) と祈っている。イエスが守ってきた「残される人々」は滅びなかったが、「滅びの子」つまりユダだけは「聖書が満たされるため」には例外である必要があった。ヨハネの中のユダは裏切り者ではあるが、「私のパンを食する者が私に向かってその踵を上げた」という聖書が満たされるために不可欠な人物であったことがわかる。

「捕縛」(一八2-13) については、接吻に関する描写がなく、ルカ福音書のようにユダはイエスに接吻しようと歩み寄ってもない。

ヨハネ福音書では、マルコ福音書と同様に、これ以降ユダに関する記述がない。マルコ福音書では、イエスとの再会を約束する場面にユダがいたとも考えられるので、ユダの死について言及がないということは、ユダは死んでおらず、その罪を赦されていたかもしれない。しかし、ヨハネ福音書では、イエスが復活後に顕現した相手はマグダラのマリア (二〇11-18) と、ユダを除く十一人の弟子たちであった (二〇19-29)。イエスとの再会にユダが含まれていないので、ユダがすでに死ん

でしまっていることも想定できる。

ヨハネ福音書のユダに関する場面を追っていくと、確かに盗人や悪魔として描かれている。しかし、ユダの行動は、神の定めの結果、つまり聖書が満たされるためにイエスが自らそう行動したとも捉えることができ、一概にユダが悪人としての「裏切り者」だとは言えないのではないだろうか。教会の初期時代に人気が高かったというヨハネの見方は、ユダのようにイエスを裏切ってはいけないという社会的道徳と、ユダがスケープゴート[xii]的な役割を担わされたことが理由として考えられるのである。

5　結論および今後の課題

四福音書のユダに関する記述を成立順に考察してきた。まず、3章で検討した共観福音書におけるユダは、確かにユダの記述に関して一致共通する箇所も多く、ユダに対して批判的な記述がある福音書もあった。しかし、マルコ福音書では、ユダがイエスとの再会を果たして、罪が赦されているという可能性があることが明らかになった。マタイ福音書では、イエスの死に対するユダの後悔から、イエスを死に至らしめるつもりではないことがうかがえた。ルカ福音書では、悪魔がユダに入り込んでいたことから、裏切りがユダの意思や背信ではないことがうかがえた。このように全体として、共観福音書のユダには、イエスを陥れようとするだけの悪人としてのユダを否定できる可能性が示唆されていることが明らかになった。

次に、4章で検討したヨハネ福音書におけるユダは、確かに共観福音書とは異なる性質を持っていた。ヨハネ福音書が教会で人気のあった時代に、批判的なユダの記述が注目されていくのだが、ユダの行動は聖書が満たされるためだったことがわかったように、今回、ヨハネ福音書にさえ一概にユダが悪人としての「裏切り者」だとは言えない可能性があることが明らかになった。要するに、四福音書全てに悪人としてのユダが否定される可能性が含まれており、ひとえにユダが裏切り者だとは言えなくなっているのである。

以上の結論から、ユダ像を探る際には福音書の記述内容を成立順に見ていくということが重要であるということがわかった。なぜなら、以前に成立した福音書の記述を参考にして編さんされている福音書もあるからだ。その場合、最初期に成立したマルコ福音書のユダに関する記述には特に注目するべきことになる。ただし一方では、マルコの時代にはなかった伝承資料がマルコ以降の福音書で用いられているという事実もある。そのため、どれか一つの福音書の記述に解釈を頼るということはできず、このような編さん過程に沿った内容分析が求められよう。

本論文ではかなわなかったが、さらに今後は、四

〈表1〉

	十二人の選び（ユダの説明）	ベタニアの香油（とがめた人物）	ユダの裏切り（動機）	ある弟子の裏切りを予告
マルコ	引き渡す	何人かの人々	不明	弟子たち自問
マタイ	引き渡す	弟子たち	報酬を要求	弟子たち自問
ルカ	売り渡す	—	サタン入り込む	自問なし
ヨハネ	—	ユダ	—	サタン入り込む

〈表2〉

	最後の晩餐（ユダの行動）	躓き予告（予告を聞いた人物）	捕縛（ユダの積極的な姿勢）	ユダの死
マルコ	出て行かず	弟子全員	接吻、ラビと呼ぶ	なし
マタイ	出て行かず	弟子全員	接吻、ラビと呼ぶ	あり
ルカ	出て行かず	全員予告されず	接吻なし、先導	（あり）
ヨハネ	出て行かず（サタン）	—	接吻なし	なし

福音書以外の『新約聖書』の文書や、正典となっている 27 の文書以外にも目を向ける必要がある。例えばユダに関する図像を資料として用いることも歴史的なユダ像を探る際には有益である。ユダの図像は、時代ごとに異なる福音書やその他の伝承にのっとって形成されていることが明らかになっている。そのため、それらの分析を組み入れることができれば、より重層的なユダについての解釈を提示することが可能になろう。

参考文献

荒井献『ユダとは誰か 原始キリスト教と『ユダの福音書』の中のユダ』岩波書店、2007 年
共同訳聖書実行委員会／日本聖書教会、佐藤優解説『新約聖書Ⅰ』文藝春秋、2010 年
ウィリアム・クラッセン、森夏樹訳『ユダの謎解き』青土社、2007 年
新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』(第 5 刷) 岩波書店、2008 年
利倉隆『ユダ　イエスを裏切った男』平凡社新書、2006 年
『一冊でわかるイラストでわかる 図解宗教史』(第 5 刷) 成美堂出版、2010 年

脚　注

i 引用は、著者名、発行年、ページ数で示した。なお、引用文は読みやすさを考え、適宜変更を加えている。以下、同様の表記。
ii ユダヤ教で、神から授けられたとされる宗教上・生活上の教示。
iii 場面のタイトルは、荒井献 (2007)　に拠る。
iv (三 13-19) は聖書三章 13 節 -19 節を意味する。以下、同様の表記。
v 聖書からの引用は、新約聖書翻訳委員会訳 (2008) に拠る。
vi イエスが最後の晩餐で、パンとぶどう酒をとり、「これは私のからだである、私の血である」と言ったことに基づき、イエスの肉と血を象徴するパンとぶどう酒とを信徒に分かつキリスト教の儀式。
vii イエスが祈るたびにたびたび訪れ、また十字架にかけられる前夜、血の汗をしたたらせながら神に祈ったとされる場所。共観福音書ではこのゲツセマネの祈りの場面でユダはイエスらのもとを離れた。
viii ユダヤ教の宗教的指導者の意。
ix 英語で Hello ほどの意。
x 自分で首をくくって死ぬこと。
xi ユダヤ教の祭司長たち、律法学者たち、長老たちのもとからイエスを捕らえに来た群衆。
xii『旧約聖書』レビ記より、贖罪のためヤギに罪を背負わせて野に放ったことから、民衆の不平や憎悪をそらすための身代わり。